可憐な罇

さばこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可憐な罨

【Nコード】

N8219S

【作者名】

ちばこ

【あらすじ】

花屋のぐーたら息子、善治は夏休みに突然仕事だと父親に無理矢理引きずられる。そこは夢にも見ない立派なお屋敷で、一人娘のお嬢様には手を出すなと牽制されるが…。

えっ小学生？俺、ロリコンじゃねーから！！

第一話（前書き）

初めまして。初心者で至らない点もあるかと思いますが、少しでも暇つぶしになれば幸いです。

第一話

“一日一善”がモットーだと言ったか、言わなかったか。

榊 善治、御年二十歳。家が割と由緒ある花屋なので、とりあえず園芸学部に通う適当な大学生だ。

花や土は嫌いじゃない。でも命かけてまでやるかって言われると困る、そんな感じ。

このままいけば、多分家を継ぐのだろう。就職難と言われるご時世だからそれもありかな。

親父が聞いたらはったおされるようなことを、夏の夜長につらつらと考えていた。

今日も焼けるような日差しだ。蝉の合唱も嫌になるくらい耳につく。どうせ同じだ、と言う俺の言葉に絶対耳を貸さない妹の善美は、今日も甲斐甲斐しく日焼け止めを体中に塗っている。

「おい、善美サン。白粉その辺にしてワコの餌やって」

「うっせーニート」

「阿呆、学生だコラ」

「チャラ男はニートと一緒だい」

「なんだと？このスポーツ刈りのどこがチャラいんじゃない」

持ってたジヨウロから水がこぼれないように、慎重に振り替返ると、

もう妹の姿はなかった。
何だってこんな酷い扱いを受けなきゃいけないのだ。
大声で抗議したいが、うちの黒柱が女に甘いので泣く泣く我慢するしかない。

「親父、朝飯」

広い背中を小さく丸めて、遺影を見つめる父に声をかける。
今日は母の月命日だ。振り返った親父の目は真っ赤で、いつになっても変わらないため息をついた。

「おお、善。悪いな。もう5年と8カ月が経ったと思うと」
ぐすん、と大きく鼻を鳴らす。

「ああもう、うるせーな！記念日みたいに数えてんじゃねーよ」
母が亡くなって5年。お兄、お兄と纏わりついてきた妹もすっかり思春期を迎えました。

家族揃って、朝食をかき込む。朝の当番は俺で、夜は善美。休日は親父という仕組みになっている。

「お兄、これ美味しい」
見事な半熟オムレツに庭のバジルを混ぜた、得意の一品だ。
「おう、美味いか。もっと食べ」

「お父さん！だから太るの！どうにかして」
「こら、善。美味しい飯もほどほどにしろ」
「俺の所為かよ?!」

いつもの嘆きにワコも元気よく「ワン！」と返事をする。まるで『

「元氣出せよ』とでも言うつよつに…。

まあこれが、母がいなくなつてからの朝の風景だ。

善美はそのまま駆け足で学校へ向かう。陸上部は朝練が大変らしい。俺も片付けもそこそこに、大学に行く準備を始めた。

「善、お前今夏休みだろ」

親父に声をかけられる。何故行くだ、という含みを持っているように聞こえたので答える。

「ああ、畑見に行くんだよ」

大学の植物を栽培しているビニールハウスは、膨大な広さなので、そう呼んでいる。

「お前、それ今日から休め」

「はあ？」

「仕事だ。ついてこい」

決めたことに有無を言わさないのが親父だ。いくら反論したところで、一向に聞く耳はもたず（父娘そっくりだな！）引きずられてトラックに乗せられた。

「おいおい店はどうすんだよ」

母がいた頃は、花屋として今の倍稼働していた。フラワーコーディネートターの顔を持つ母がいなくなった今は、店も半分ほどに収めている。親父は元々は植木職人で、傍らに造園業も営んでいたのだが、同じく今はお得意様専用になっている。

よって家族とパートの井出さんだけでシフトを何とかこなしているのだ。

いくら何でも、井出さんだけに押し付けるのはどうかと抗議した。

「今日から2週間は休みだ」

「ええ?!」

初めてのことに驚きを隠せない。

「ど、どんな大型な仕事引き受けたんだよ……」

答えが全く読めず、恐る恐る聞くと、親父はあっさり言い放った。

「馴染みの屋敷の一掃整備だ」

それ、二人で出来んの?!

第二話

小一時間は車を走らせていただろうか。

見るからに高級住宅街という清閑な道を通り、さらに奥へ奥へと進む。

行き止まりかと見上げたそこに、大きな門とお屋敷があった。

「でけえ……」

ため息と一緒に呟く。こんな家、外国のテレビでしか見たことなかった。

「降りる。しつかり挨拶しろよ」

いつになく真剣な（気がする）目を向けられ、慌てて姿勢を正す。

チャイムはどこにあるんだ？と探していると、ギギギ…と鈍い音を立てて門が開いた。

7

「榊さん！」

嬉しそうに、綺麗な女性が近付いてきた。二人で会釈する。

「どうも、このたびはお世話になります」

「やだ、こちらが無理を言ってお願ひしたのに…息子さん？」

親しい雰囲気醸し出すその人に目を向けられた。

「あ、はい。長男の善治です」

「初めまして、結城家の使用人の鳥居尚子です」

にこつと微笑まれる。どおりで、メイドとまではいかないが黒いワンピースに白エプロンをつけているわけだ。

「お話したとおり、ご当主が海外に行っており不在ですので、ご息女のと華様よりご挨拶させていただきます」

「恐縮です」

なになに？何だって？！聞きなれない単語の羅列に、親父を凝視する。

その様子を見て、鳥居さんが面白そうに言った。

「榊さん、やっぱり何も話されてないんですね。立ち話もなんですから、どうぞ中にお入りください」

鳥居さんに案内されて、屋敷目指して歩いて行った。

「和華様は、最近体調が優れなくて。お出迎えできず申し訳ないと言いつつ参りました」

ほお、体が弱いつてのはまさに深窓のお嬢様と言う感じだな。

「私、こちらに勤めて九年が経ちます。その頃から榊さんに通っているんですよ」

「え、店に？…ですか？」

途中親父に眼を飛ばされ、慌てて言い直した。

「はい。治美はなみさんにもとてもお世話になったものです」

母の名を懐かしそうに呼び、少し空を見上げた。今はいないのも知っているのだろう。

少し間があいて、親父が続けた。

「鳥居さんはな、うちの花や植木を気に入ってくださるお得意様なんだ」

「まだ新人だった私が、奥方様の書齋に飾ってから、とてもお気に召されて。お屋敷でのお花はお願いできる限り榊さんのものなんですよ」

「いつもご依頼いただいていたのにすみません」

「いえ、民間のお店に頼む方が無理な話だったので」

確かに：この広さは学校ひとつぶんは勇にあるだろう。屋敷中の植木を親父一人でこなすのは無理だ。

「今回は、ご当主と奥方様が長期出張に行かれている間のサプライズなのです」

いたずらを企むように、鳥居さんは声をひそめた。

「今日から2週間後、ご帰宅される日は奥方様のお誕生日で。お屋敷が綺麗になるの、とてもお喜びになると思っています」

「信頼できる仲間も呼びました。必ずやご期待に沿えるよう頑張ります」

「ありがとうございます」

俺の存在そっちのけで、二人は堅い握手を交わしたのだった。

腑に落ちない点もいくつかあるが、親父がここにいる理由は何となく分かった。

話すうちにようやく着いた、家の中に通される。

ただっ広い大理石の玄関で靴を脱ぎ、ホテルのロビーのような螺旋階段を前にして、何だか違和感を覚えた。

外は照りつけるように暑いのだが、屋内は打って変わって空調が効

き過ぎるくらいに冷えている。

せつかくの日差しも頑丈な窓で遮断され、何だか物暗い（シャンデリアとかあるから、ちゃんと明るいけど）印象がした。

美術の教科書で見たような絵画の下にある立派な花も、これじゃあすぐダメになるだろう。

応接室か何か分からないが、立派なソファのある部屋に通され、お茶を飲む。

「それでは暫し、お待ちください」

そうして鳥居さんはお嬢様とやらを呼びに言った。

この屋敷はどれほどの広さなのだろう。5分経っても来る様子はない。

いやに緊張していた体も限界で、徐々にだらけていった。

「なあ、仲間って誰？」

気持ち小さめな声で話しかける。

「昔世話になった兄弟子だ」

植木職人は上下関係がとても厳しく厚い。その人たちを呼ぶほどまですぐに責任のある仕事なのだ。

「すげえな。俺いる意味あんの？」

一番の疑問を口にする。搬送などで助手は務めても、実際に手入れすることはなかった。

「裏庭にガーデニングできる場所があるらしい。お前そこやってみる」

素っ気ない言い方だが、一人で任されたことが嬉しかった。その気持ちを返事にのせようと口を開くと、

「あ、お前お嬢さんに手出すなよ」

と、慌てて付け加えてきた。

「え？そんな大人なの？」

だったらどうする気なのかと拳骨をくらってしまった。

「馬鹿野郎。まだ小学生だ」

「アホか！ロリコンじゃねえよ」

せつかくの期待も泡となり、脱力する。

「ていうか、小学生でご挨拶かよ、すげえなあ…」

何か可哀想だな、と頭の隅っこだと思った。

静かな空間に時計の秒針が響く。

1分、2分…。

いや、しかし遅い。

15分は経っていないだろうか。

部屋は冷えるし、冷たい茶を飲んだしおまけに緊張したしで、もよおしてきた。

「ちよつと俺、便所行きたいんだけど」

「阿呆！お客様のトイレなんか借りれるか。外でしてこい」

「ええっそれもどうなの」

「屋敷出たら公園がある。そこしかないぞ」

うへえ、と情けない声を出し、お嬢様には申し訳ないが小走りで行った。

第三話

無事トイレを済ませた俺は、屋敷に戻るのも気が引けて車のある場所を探した。

門の中に入っただけで左に行くと、どうやら駐車場になっているようで、親父の車や既に到着していたのか、業者の車も何台があった。

今日はどこまでやんのかな？そんなことを考えていると、視界の端っこにブルーの布地が入った。

思わず眉を顰める。正体を見ようと奥を覗くと、淡いブルーのワンピースを着た女の子が身を乗り出してトランクの中を見ていた。

そよ風によつて、ふわふわとワンピースが泳ぐ。

トラックの数々には、植木の作業に使う道具がたくさん入っている。俺の存在には気付かないのか、女の子はそおっと大きい断ち切り鋏に手を伸ばし始めた。

「ちよつと！」

慌てて声をかける。

するとびくつと肩を揺らし、こちらを振り向いた。

透き通るように白い肌に、大きい瞳。

少女と呼ぶには大人びていて、成人と言うにはどこかあどけない。どこかの中学生か高校生か？言葉に迷いつつも、きちんと注意した。

「それ、危ないから勝手に触らないで。きみ、どこの子？」

ポインセチアのような真っ赤な唇を真一文字に結んで、その子はキツと睨みつけてきた。

謝る様子もなく、こっちがたじろいでしまう。

「あの、」

言い方がきつかったか？そう思って話しかけた。

すると、女の子は面白いくらいに、つんと顎を空に向けて背中を向け、走り去ってしまった。

「あ、おい！」

俺の言葉には振り向きもせず。

なんだ、あれは。あんな子どもっぽいことして、高校生が。

普通、謝らないか？善美でもあんな態度しないぞ。

途中で行き場を無くした手で、寂しく頭を掻く。

そして、思い立ったのだ。

まさか “お嬢様” か？あれが？

今度は無意識に手のひらが口元にくる。

やばい、俺さつき『どこの子？』って言わなかったか？（言った）

子どもとは言え、相手は客だ。見るからに上客で、不躰な態度は許されがたい。

これは、先に謝っておかないと…！

そうして俺も慌てて屋敷に戻って行った。

「こら！どれだけ時間かけてんだお前は」

玄関に着くと、親父のかなり抑えたお叱りを受けた。

「和華様、ご子息の善治さんです」

鳥居さんに促されてこちらを見る瞳は、やはりさっきのものと同じだった。

しかし、相手は思いもよらなかったのか、また大きく見開いた。

「あ、さっきは…」

「初めまして、娘の和華です。このたびは学業の合間にお手伝いくださるということ、心よりお礼申し上げます。両親がいない間で不備があるかと恐縮ですが、何かありましたらお気軽にこの鳥居までお申し付けください」

ぺらぺらと、それはもう素晴らしい舌回りでお嬢様は言った。

その堂々たる様子に、鳥居さんも親父も見惚れているかのようだ。

言いきつたあと、さっきは直線だった唇をふんわりと上げ、『淑女の微笑み』と言うのを目の当たりにした。

なんだ、ちゃんと(?) 挨拶できるじゃないか。そう安堵して、口を開く。

「あ、こちらこそ」

「それでは」

くるつとワンピースが回り、お嬢様は階段を上って行った。

その華奢な背中には『話しかけるな!』と大きく書いてあるようだ

…。

おい、俺の話分かってぶった切っただろ。

よくよく見れば態度も、線が細すぎる体も小学生そのものだ。

それに加えてあの負けん気の強さ。どこが深窓のお嬢様だ!

と思ったら、先ほどのような大人顔負けの立ち振る舞いを見せたり、

彼女のアンバランスさに、俺は目をいつまでも白黒させていた。

第四話

寒い、この部屋は、この家は。
いつも静かで独りぼっち。

ドタドタドタ…っ。

屋敷の中でこんな足音を平然と出せるのは一人しかいない。

「和華さまっ」

トリイの得意技、“ノックと同時に扉開け”だ。

返事をするのも怠いので、布団の中にもぐり込む。

「和ー華ー様！ご昼食いただきますいっ」

長年の私専属の教育係である使用人、もとい姉のような存在である彼女には遠慮というものがない。

「いやあー」

か細い抵抗もこの女には片手で足りること。にべもくれず、一気に布団をはがされる。

「もうおご馳走様しました！」

ちゃんとしたんだ！と言う悔しさから頬が膨らむのを止められない。

「え、あれで？今日は和華様の大好きなハーブのサンドイッチです

「よ」

「もうお腹いっぱい」

一口かじってお終い。

最近はずっともお腹が減らなくて、食事が億劫だったのだ。

「お熱ありますか？」

トリイの眉毛が少し八の字になって、指先が荒れた細い手を額に当てられる。

私を心配する手は、母よりトリイのときが多かった。

「そうですねえ…少し微熱がありそうですね」

「私、寝とく。ピアノの練習は夕方になります」

「それは構いませんが…何かお飲み物持ってきてきましょうか？レモネードかハーブティーは？ココアでも良いですよ」

どれにも首をふって、横になる。

「今日から榊さんのお仕事始まりますから、騒がしいかもしれません。さんが、ゆっくり寝ていてくださいね」

さつきとは全く違う、優しくてちょっと甘い声で、トリイは布団を喉が隠れるくらいにかけてくれた。

お父様とお母様がフランスへ行ってもう1週間。帰ってくるまであと…それでも両手で数えきれないことにため息をついた。

大体その前でもお仕事の準備に忙しいと、ほとんどお顔を合わせることもなかったから、この夏休みが退屈過ぎて仕方がない。

まだ学校がある方が良かった。

親友の七ちゃんもこの時期は家族でオランダか何処か行くって言うていたし。
宿題もとうに終わってしまった。週に2日、お茶とピアノのお稽古があるだけ。
外に出て遊ぶ術も知らないし、とつても暇を持て余している。

世話焼きでうるさいトリーが興奮して、いつものお花屋さんに家の周りを綺麗にしてもらおうと言って、昨日お父様くらいの男の人と、口が悪い男の人がやってきた。
トリーはいつもその花屋さんの話をしていた。聞いてもないのに、今日のお花はどうこうで、花言葉はどれそれで…って。
そりゃあお母様はお花が大好きだから、この洋館風なお家が綺麗になつたら喜ぶと思う。

でも私は嫌い。

土は汚れるし、泥の匂いもする。
虫なんか見たくもないから、お花屋さんになる気持ちがちつとも分らない。

し・か・も！見たことない大きいハサミとか、掃除機があつたから、ほんのちよつとよ？
ほんのちよつとだけ触ろうとしたら、あの言い方。
子どもじゃありませんっの！！

くたくたのジーンズとよれよれのTシャツ姿の男の人を思い出した。
ムカムカムカ…。大声を上げるのははしたないと怒られるからギョツとシーツを握って我慢する。
これから毎日来るのか…。嫌だな。

そんなことを考えてるうちに、だんだんと夢の世界に入っていった。

第五話（前書き）

お気に入りいれて下さった方ありがとうございます！

第五話

これから2週間か…。

まだまだ全然見慣れないでつかい屋敷を目の前に生唾を飲み込む。

俺の担当は裏庭の土作りから、種まき。

親父は屋敷を囲む木々の伐採。他に手伝ってくれているのが、親父の兄弟子の山本さん、長岡さん、そして弟子の鈴木さん。

これはもうヤマさん、チヨーさん、スーさんで覚えることにした。

真夏の太陽の日差しをガンガンに浴びて、男くさい職場になるなど苦笑した。

午前中は土の配合だけで終わってしまった。

昼飯は鳥居さんが、おにぎりを作ってきてくれて、それを冷たいお茶で流し込む。

首にかけてタオルで汗を拭いながら、それでも結構真剣にやった。

ようやく一息つけるところまで来て、日陰になっているところで休憩を取る。

まだまだこれから西日も強いから、暑さには油断できない。

日射病にならないよう、スポーツドリンクはこまめに飲んでいた。

そっぴや、今日はあのお嬢様見ないな。

善美でもほどよく小麦色になっているのに、あの子は真っ白だった。どうやったたらあんなに白くなれるんだ。善美に教えてやってくれ、と心に毒づいたとき。

ポロン、ポロン…と言葉で表すのも情けないが、ピアノの音が聞こえてきた。

つつかえることもなく流れるように鳴るその音楽に、俺は耳を澄ませて聞いていた。

すげえな、お屋敷って。

最早何がすごいのか分からないが、そればかり思っていた。

「あ、善くん」

「どうも」

鳥居さんが覗きに来てくれた。

「おおー、すごい雑草ばかりなのが綺麗になってる！」

「一度植え替えしちゃいますからね」

「本当に今回はありがとう」

にこっと随分くだけた笑みを向けられた。出会って2日目だが、両

親を知ってる分、打ち解けるのに時間はかからなかった。

「あ、和華様ピアノ弾いてらっしゃるわ」

鳥居さんに合わせて、頭上の窓を見やる。

「そっなんすか」

「今朝も食欲がなくなつて、寝込まれてただけど…良かった」

「お嬢様ってほんとに小学生なんですか？ランドセル背負ってんの？」

ふふつと鳥居さんは笑いを零した。

「本当よ。ランドセルはお使いになってないけど、12歳になられたばかり。きつとご当主様がおられなくて寂しいんだと思うの。一言も口に出さないけど…。そういうとき何も出来ない自分が悔しいわ」

「2週間いないんですっけ」

「丸々3週間なのよ」

自分のときはどうだっただろう。小学生…ちょうど母さんが死んだときの、善美の年だ。

出張と永遠の別れは違つかもしれないが、善美はしばらくずっと俺にくっついていた。

それくらい、まだまだ親が恋しい時期だと思つ。

「ほんと可哀想ですね」

そんな素振りを見せず、父親の代わりに挨拶をする姿を思い出し、そう呟いていた。

鳥居さんは、それには何も返さず、少し悲しそうに微笑んだ。

「少し、買い物に行つてきますね。お嬢様も元気そうだし、すぐ戻りますから」

それからしばらく軽快にピアノの音は続いていた。何の曲かも分からないが、心地よく聞いていると、

ガッシャーン

と、鍵盤を全部叩くような音がして、音楽はぷつと切れた。

…終わりか？

カーテンを全面にひいて、ぴっちり閉まっている頭上の窓を見上げる。

何かイライラしたのかな。

首を傾げて、作業に戻った。

…のだが、何故か胸騒ぎがして。何度かピアノが聞こえてきていた窓を凝視した。

白いカーテンだが、分厚い生地なのか中はちらとも見えない。胸のもやもやが気持ち悪かったので、スコップを投げ捨て、屋敷を覗いてみることにした。

「失礼しまーす…」

恐る恐る玄関に入る。外の日差しがキツイ分、やっぱり薄暗く感じる。

「あのトイレ借ります!」

一つ咳払いをして、螺旋階段を上って行った。

広い廊下には、高そうな壺や生け花が飾ってあって、塵一つ落ちていない。

別に悪いことをする訳じゃないが、忍び足で歩いてしまっ。

裏庭が西だから、右だろ？

階段から右にはっつ扉があって、一番端っこを指すと、少し開いていた。

軍手が汚れていたから、視線だけで中を覗くと、

「おいっ！」

予感的中でも言うのか。

お嬢様が頭をピアノの鍵盤につけて気を失っていた。

白い腕が、何だか青く見えて慌てて近寄る。

今日に限って生成りのワンピースか。触ると泥がつくな…と多少躊躇ったが、軍手を投げ捨て体を持ち上げた。

そして、すっかすかの段ボール箱みたいな軽さに驚いた。

「おい、しつかりしろ。どうした？気持ち悪いのか」

声をかけると、うつすら目を開けて、微かに頷く。額から脂汗が出ている。

貧血か？と思い、すぐ横になれるベットを探した。

この部屋はピアノ専用らしく、革のソファしかない。

こんなところで寝られるか！と思い、隣の部屋を足で開ける。

隣は本棚ばかりだったので、迷わず3つ目の扉を蹴破る。

すると、お嬢様の部屋らしきところに当たり、ベットに寝かせた。足を高くするんだよな。ふわっふわの枕に舌打ちしながら、足の下に置く。

お嬢様の顔は血が通ってないんじゃないかと思うほど、不気味な白

さになっていた。

苦しそうに眉を寄せている。額の汗を、首にかけてあった汚いタオルで拭ってやる。

そのとき指が頬に触れて、すごく冷たかったので、俺はまた焦った。

「おい、ほんとに大丈夫か。寒いか？」

そう言えば、この部屋もよく冷えていて、俺の汗もすっかり引いている。

お嬢様は口を開けたが、カラカラに乾燥しているのか声にならず、すぐ閉じてしまった。

「よし分かった。待ってるよ」

正直何も分からなかったが、とにかく力づけようと、安心させるように頭を撫で、とりあえず窓のカーテンを勢い良く開けた。

目を細めてしまうほどの西日が部屋いっぱいになり注ぐ。

そして重厚な窓を開け、少しムツとするくらいの湿気のある空気を入れ込んだ。

うん、これくらいちょうど良いんじゃないか？人間にも太陽浴びるのは必要だろ。

そして、俺はもう一度裏庭に降りて、温くなったスポーツドリンクを取りに行った。

自宅なら10歩の距離がもどかしい。大きい家も考えもんだな、と走りながらぼやいた。

お嬢様はまだ寝ている様子だったが、さっきより顔色が良くなっていて、ホッと息をつく。

「おいお嬢様、これちょっと飲みな」

体が起きるのを手伝ってやり、口元に持っていく。
ビタミンたっぷり銘打った商品だ、少しくらい取り入れてっくれ。

ふた口くらい喉を通ったのを確認して、また寝かせた。

ここまでくると善美が風邪で寝込んだのとかぶり、頬を軽く叩く。

「大丈夫、すぐ治るよ」

そうやって看病していた癖で言った。

しばらくお嬢様の顔を眺めていたが、寝息も安定してきたので外に出ようと階段を降りる。

「善くん!？」

買い物袋にいつぱいの荷物を抱えて、鳥居さんがちょうど帰ってきていた。

「ちょっと！鳥居さん、お嬢様貧血で倒れてたよ」

「うそっ今どこに?」

「お嬢様の部屋？悪いけど運んだ」

「ううん、ありがとうっ」

言いながら、買い物袋を投げ捨て走って行く。

はあ、とため息をついて落ちたそれを拾った。

「おーい、誰かいませんかー?」

大声で言うと、奥から屋敷の人がでてきて、どうも、なんて言いな

がら荷物を受け取る。

なんだ、他にも人いるんじゃないか。予想していただけに腹が立つ。

広すぎる家に、重そうな扉。子どもが寝込んだって気付くことも出来ない。

この家はダメだ！急に怒りがこみ上げてきて、裏庭に戻った。

なんたつて、陽の光をいれないのがダメだ。クーラーも効き過ぎて良くない。

お嬢様も、少しくらい外出の方が健康のためじゃないか？

すっかり母親の気分でぐだぐだと文句を並べた。

それでも腹からわき出る怒りは治まらなくて、なんでここまでムカついているのか、自分でもよく分からなかった。

第六話

今朝もうだるような強い湿気と変わらぬ暑さで始まった。

「…い。お兄！」

ドン！と箸を叩きつける音でハッと我に返る。

「あ？何だよ」

「ケータイ鳴ってますー」

頭大丈夫？という小さい罵声は無視して、慌てて震え続けるケータイを手を取ったが、僅かのタッチで留守電に切り替わってしまった。着信を見ると大学の友人だった。こいつなら聞かずとも要件が読めるので無視することにした。

「お兄、昨日からイライラしてんね」

善美が白米を口いっぱい頬張りながら言う。

「お前…朝からよく食うな」

それには答えず、朝から見事な食欲を見せる妹に感嘆の声を上げる。

「それはどうも。お兄様は恋のお悩みですか？大変ですね」

「は？」

聞き慣れない言葉に今度は新聞を落とす。

「え？何、凶星？やだーきもい」

カッカカッと、箸で米をかき込む小気味良い音が響く。実に男らしい食べっぷりだ。

…それは今日に始まったことではない。善美の大食いは中学からで

知ったること。それなのにいちいち感心してしまうのは、白こいお嬢様と比べているからだ。虚勢を張るのも馬鹿馬鹿しいと思わせる、か弱く薄い体。ちよっと力を入れればポキッと折れてしまいそうな細い腕には、長い髪がまとわりついて。

そこまで考えて、俺は頭を抱えた。

「うわぁーやめろー！そんなんじゃないから！」

悲鳴をあげて、自分自身に全否定する。

違う、俺は犯罪者じゃない。断じて恋なんて……

アホらしい。

ふっと鼻息をついた。

妹の目の何と冷たいこと。

落ちて着こうか、俺。

確かに昨日から頭の中にアノお嬢様がいる。しかしそれは母親代理の経験があるからこそ、屋敷の体制が気に入らず、このままではあの子がひねくれて育っていきそう、見ていられないからだ。既にその感じ垣間見えたしな。

あれから調子は良くなったのだろうか。

鳥居さんに聞いてみよう。俺はやっと自分に納得いく決断をして、
今日も屋敷に向かったのだった。

「おはようございます」

「やあ、善くん。おはよう」

親父の弟弟子スーさんは穏やかで、とても優しい人だ。恰幅の良い
体は正に山男。

だが、微笑みながらなぎ倒すように木を間伐する姿には、末恐ろし
いものを感じた。

少し世間話をして、自分の持ち場に戻ろうとしたとき、

「これは記念樹かな」

という呟きが聞こえた。

「このヤマザクラですか？」

何かの祝いごとに植えるものだが、大分荒廃していた。

「ああ、いや気のせいかもしれないけど、これだけ向きが違つから
確かに、ここら一帯はヤマザクラが植えられているのだが、その樹
だけ西を向いていた。」

一見丈夫に見える樹も、他の樹の栄養を吸い取り成長を邪魔するこ
とがある。そんな樹々を伐採する間伐は、樹や土を守るのにとても
大事なことだ。

「そういう樹があるとは聞いてないけど、何か申し訳ないよね」

病人を労るように、スーさんは幹を撫でた。どんな樹や草にも大事な命があると、小さい頃から何度も聞かされたので、スーさんが悲しそうな顔をするのも分からなくはない。

「え？記念樹？」

お茶を注ぐ手を止めて、鳥居さんは首を傾げた。ヤマザクラの話しをしても、思い当たる節はないようだった。

「和華様にも聞いてみるわ」

「お嬢様、調子どうなの？」

「うん、あれから良く寝られて熱も出なかったわ。まだ食欲はわかないみたいだけど」

3つ目のおにぎりを胃に収めた俺を見て、ため息をつかれた。

「あのさあ」

少し運動させればお腹も空くんじゃないか、と提案しようとしたとき、少し甘えた声が聞こえた。

「トリーどこー？」

「和華様だ。じゃ善くん頑張つてね」

早口で言い捨て、はあいと返事をしながら走って行く。過保護すぎないかと苦笑した。

しばらくして、門の前に一台のベンツが来た。屋敷来て初めての来客を物珍しく見ていると、お嬢様が出た。お嬢様は家から出てきた。

「行って参ります」

凜とした声に、鳥居さん始め使用人達が頭を下げる。

若草色に小花が散らしている着物姿は、真夏だと思えないほど涼しげだった。

視線を感じたのか、お嬢様と目が合う。薄化粧でもしてるのか、とても小学生には見えなかった。

なんつー世界だ…と瞠目していると、思い切り顔をしかめられた。

おい、なんだその顔は。

嫌なものを見た、と書いてある。癪なので眉をあげて引きつり顔を返すと、途端に口をへの字に曲げ、またつんと顎を上げて勇ましく歩いて行った。

車は来客ではなく、お嬢様の送迎らしい。肘を大きくふって歩く姿に、笑いをこぼした。

何で嫌われてるのはかは知らないが、子どもらしいところもある。小さい後ろ姿を見て知らずに微笑んだ。

「あのね、和華様にお伝えしたのよ。善くんが助けてくれたこと」お茶の稽古に出かけたお嬢様を見送って、鳥居さんが言う。

「最初、善くんに怒られたんでしょう？不意打ちだったのか、もお意固地になっちゃって。それなのに助けてもらったって知ったとき
の和華様の顔！」

あれは大人と子どもとの狭間で葛藤してた、と悦に入って言われた。

「はあ」

「きつと、帰られたら御礼を言いにくると思うわ」

嬉しそうに、くすくす笑う。

「いや、礼なんていらないうすよ」

「いいえ！してもらいます。それが淑女の嗜みというもの。どんな
お顔でいらつしやるのか楽しみだわ」

何故恍惚とした表情かおをしているのだ。

いいのか、こんな使用人で。

どこも女は強いなと照りつける空を仰いだ。

「スー…ずきさん」

頭を掻くスーさんを見つけ声をかけた。彼は、手にあるペットボトル
くらいくらいの木材を見せながら、

「さっきのヤマザクラだよ。間伐の許可はもらったんだけど、どう
しても思い入れがある気がして。文鎮とかハンコにでもしないかな
ってさ」

と肩を竦めた。それがここにあるということとは断られたのだろう。

「まあ余計なお世話だったかな」

手をふって持ち場に帰って行った。

大樹からしたらひとかけらのそれが、一粒の涙に見えて酷く消沈し
た。

廃材は再利用して家具などで生きることもあるが、それは利用できる部分が多いときの話だ。

あのヤマザクラでとれたのはほんの僅かだったのだろう。

いらぬ、と言われた苦い気持ちだが、俺の腹の中に溜まった。

「さ、かきさん」

気づけば夕日が落ちていた。土をいじるのに夢中になっていたらしい。

「え？」

顔を上げると、お嬢様がワソピースをギュツと握って俯いていた。

「お礼？いいよ、子どもなんだから」

ひらひらと手をふって、顔を戻す。

「馬鹿にしないで！子どもじゃありませんっ」

強い口調で凄まれて、俺は立ちあがった。

「ふーん、子どもじゃないの」

逆光に目を細めながら言う。

「…昨日はありがとうございました。言いたいのはそれだけです」

「子どもじゃないなら言うけど。礼はちゃんと目を見て言いな」

びくつと肩が揺れて、恐る恐る顔が上がった。

「それから、アンタは俺たちが雑草でも抜いてんだろっと思っただのか知らないけど。どんなモンにも命はあるってこと、子どもじゃないならよく考えな」

目の前の小さい影がどんな顔をしているのか。

12歳の子どもへの言い方が他になかったのか。

そのときの俺には考える余裕はなかった。

第七話（前書き）

更新、遅くなってしまいましたすみません。

第七話

後悔先に立たず、後の祭り。

あと何がある？

ああ、“強い自責の念にかられる”。

…どの言葉も、時間が経つにつれて俺の胃を更に重くする。

詰まるところ、俺はお嬢様へ働いた感情のままの言動を、非常に後悔していた。

小さい体が震えているのも気付かずに、『子どもじゃない』と突っ張るご令嬢に。目も合わせられぬ小心のくせに、体面だけを気にした突き放す言い方に。

…我慢がならなかったのだ。

ならなかったって…俺がガキか。何回も呟いた言葉が荒れた胃に染みる。

「スウ~~~~~」

隣りで、わざとらしい声が俺を現実に戻らせた。

「10回目」

「何が」

顔を見るのも腹立たしい。使い終わった道具をひたすらしまうことに専念する。

「善チヤンの甘いため息。幸せ10こ消えたから吸ってあげたんだぜ」

「うるせえな！数えんなアホ」

俺の罵声をもろともせず、やつは楽しそうに口笛を吹いた。

悔しいことに、長年の付き合いで俺の勝手知ったる幼馴染は、大方予想をつけているのだろう。

「何があつたんだよ。ほんとにお前仕事先のお嬢様にいかれちゃったの？」

井手雅之…奴は腐れ縁であり、うちにパートに来ている井手さんの息子だ。

急に仕事が休みになった理由がボンクラ息子に筒抜けなのは分かる。しかし、何故あのお嬢様のことを知っているのか。

「……………」

「何で知ってるかって？そりゃ善美ちゃんに聞いたんだよ」

俺の仏頂面だけで読み取った井手は得意そうに答えた。ハア…と本日11回目になるため息をつく。

「なあなあ、どんな娘なんだよ？可愛いのか？」

「……………」

「おん前、そんな面白いネタ早く教えてよなー！あんな暇人だった

くせに急に大学来なくなつたから、心配したんだぜ」
そういえば、こいつから着信がきてたな。夏期休暇であれ、毎日のように通っていたから不思議に思ったんだらう。

「なあに？面白いネタって」

後ろで声が聞こえた。

「園田さん！」

井手が飛び付くように振り向いた。

「お疲れさまっす」

「お疲れ。ふー暑い」

パタパタと胸元を扇ぐ。院生2年の彼女は就活中なのか、見慣れないスーツ姿だった。

「どーしたんすか？久しぶりじゃないっすか」

井手から尻尾が見える。

「ん？来ちゃダメだった？」

「んなわけないです！」

艶のある黒髪を顎のラインで切り揃えた園田さんは、涼しげな目元を細めてにっこりと微笑んだ。彼女は俺たちの学部の先輩であり、男子のマドンナ的存在だった。

「園田さん、これ例の種です」

俺は、小袋を渡した。

「ありがとう！助かるわ」

これこそが、本日の俺の目的で、あんな直後だが仕事を休んで大学に来たのだ。世話になっている先輩の頼みだ、仕方なかった。

「卒論で、どうしても使わなきゃいけない。もう就活とWパンチで参っちゃうわ」

「あれ園田さん、造園業の会社内定もらってませんでした？」

井手が情報をフルに使って聞く。

「やだ、何で知ってるの？」

わざと唇を尖らせる姿でも嫌味なく様になる。

「…そうなんだけど。私、ウェディングプランナーやりたくて。園芸とちよつと外れるけど、ブーケとかそつちに興味あるんだ。だからまだ続けてる」

へえー！と大袈裟に井手犬が尻尾をふる。こいつは入学当時から園田さんに惚れてるのだ。

「いや、まじ園田さんに似合うと思います！応援します！俺の憧れですから絶対大丈夫ですつて」

最後はキャツと両手で顔を隠したため、聞こえなかったようだぞ、井手。

「ふふっありがとう」

サラッと流す園田さんからは、大人の余裕を感じた。

「それより、榊くん。これのお礼させてよ」

渡した種の袋を振って、顔を覗かれる。ボタンの開いたシャツから胸元が見えそつで、慌てて目を逸らした。

「そんな、いらないうすよ。いつも世話になってるし」
「遠慮しない」

ぺしつと頬を叩かれた。

こうなると、この先輩も頑なんだよなあ…と俺は頭を掻いた。しばらく考えて、口を開く。

「園田さん、いくつでしたっけ」

「…やなこと聞くわね。まだ23よ」

学年は4つ違いだ。俺と、お嬢様の半分か。

「えーと…年下って気遣いますよね？」

「人によるけど。榊くんにはしない」

「もし、相手がえらく年下って知っててケンカ売っちゃったらどうします」

「売っちゃったって」

園田さんは吹き出した。

「なあに？痴話ゲンカ？もーそういうのは相談なんかしないのよ！」

「ち、違います。妹です妹」

「あん？善美ちゃん？」

井手の言葉はシカトだ。

「悪いのが自分って分かってるなら謝るわよ」

当然でしょ？と言わんばかりの上目遣いが胸に刺さった。

「そうですね…謝る」

「榊くんのプライドが邪魔してるんだ」

園田さんはおかしそうに言った。

「早く謝った方がいいわよ。日が経つにつれ頑なになっちゃってから」
「……………」

園田さんに呟いたはずの言葉が自分に返ってきて、うなだれるしかなかった。

「園田さん、コイツのこと良く分かってますね」
井手が感心する。

「そお？良く見てるからね」

「すみません！俺、用事あるんで失礼します」

園田さんと同時に発した俺は、井出の慌てる声にも気付かず、屋敷に向かつて走って行った。

井手、感謝しろよ。

二人きりのうちにデートの一つでも取り付けておけ。

やっと辿り着いた、見慣れたはずなのでかい屋敷からは、訪れる者を巢食うような圧力を感じた。一步を踏み出し辛いのは、自分にやましいところがあるからなんだろう。

「あれ？善くん？」

タイミング良く鳥居さんを見つけた。

「あー、えっと…お疲れさまです」

何と切り出せばいいのか、情けない声しか出ない。

「お疲れさま。今日は来られないってお父さんから聞いてたから、ありがとう」

「いえ…。えっ？」

俺は瞠目した。

遠目に大きい麦わら帽子をかぶったお嬢様が、むさくるしい親父達の中にいたからだ。

「…びつくりでしょっ？」

鳥居さんも嘆息する。

ハゲだったり、もじゃもじゃ髭だったり、太ってたり。見目よろしくない男たちの中に、ぼつんと咲いた花のような。小さい顔からは確かに白い歯がこぼれている。笑っているのだ。

「今朝から急にあんなご様子で。善くん、何か言った？」
首を捻る鳥居さんの声は頭まで入って来なかった。

子どもらしく、体を曲げて楽しそうに笑う様は、お嬢様本来の姿のように思えた。

ここに来て初めて見た笑顔に、目を離せない。

しかし、何で笑顔？

昨日俺、怒ったよな。我ながら八つ当たりだったと思う。

ヤマザクラの件は、お嬢様がいららないと言ったらいらぬことなのだ。そこを、納得のいかない俺は噛みついた。…結構ビビってたよな？固まって動かないお嬢様を放置して帰ったのを覚えている。

頭の中で何とかこの状況を整理しようとする俺がいた。

結局答えは出なかったので、親父たちを避けるように裏庭に逃げた。

俺が近付いて、あの笑顔がなくなるのが 悔しいことに嫌だったのだ。

「おい善！」

牙を剥く声に振り向く。機嫌悪さMAXの親父の声だ。

何がどう彼を怒らせてるのか、踏ん返り返るように仁王立ちする手には 小さな少女がいた。

お嬢様と、親父が、手を繋いでいる。

危険な絵面に何度も瞬きして、現実かどうか確かめる。

「おめえはしょうもないこと言いやがって馬鹿野郎！」

隣の少女がいなければ殴りかからんばかりの形相に、思わず後ずさりする。

「よしパパ、怒らないで」

「“よしパパ”？」

目玉が取れるもんなら、間違いなく転がり落ちていたと思う。

「聞けばてめえが100パーセント悪いが、和華ちゃんが謝りたいと言つので俺は我慢する。感謝しろ」

「“和華ちゃん”？」

突っ込んではいけないのに、してしまふ悲しい俺の性。

「じゃあ、このボンくれに何かされたら遠慮なく言うんだよ」

それはもう気持ち悪いほどに優しい声で、親父はお嬢様を置いていった。

俺は混乱した頭を落ち着かせるため、凄まじいスピードで状況を繰り返した。しばらく沈黙が続く。

「あのう…昨日言われたこと、一生懸命考えました」

すっかり俺の顔を見て、お嬢様は切り出した。

「どんなものにも命があること。道徳でも習ったのに忘れていたと思います。ごめんなさい」

道徳？懐かしすぎる単語に、笑ってしまった。

「お父様がない間は、私がこの家の主人なのに、お仕事してくれ

る方たちのこと何も考えてませんでした。だから……」
そこでお嬢様は大きく息を吸った。

「お花のこと、いろいろ教えてください！」

勢いよく頭を下げ、大きい帽子がころんと落ちた。
それを拾って、小さな頭に被せてやる。大きい目が、俺がどんな言葉を言うのか少し揺れながら待っている。

知らずに口元に笑みを浮かべて、俺は頷いた。

「いいよ。昨日は、俺も言いすぎた。ごめん」
俺も心から頭を下げた。後悔で、あんなため息ばかりの一日を送るのはこりこりだ。

顔を上げると、しかめっ面しか見せなかった顔が、一面に花を咲かせるように笑っていた。
頬を上気させ、日差しと重なって眩しいくらいに。

「じゃあ、仲直りだね。ゼン！」

あん？！

幻聴か？目の前の小さい生き物を凝視すると、お嬢様はニヤリと口

元を上げた。

「よしパパが、ゼンは小学6年生の問題も分からないって言ったから、呼び捨てでいいって」

「はい?!」

「私のこともワカって言うていいよ」

勝手に人見知りを解いて、馴れつく様子に俺の方がとまどってしま
う。

「…ワカ?」

「はい!」

何の警戒心も見せない、清らかな笑顔を見ていると、変に緊張して
いた心がほぐされていく。

何だよ、これ。

こっそり悪態をついても、馬鹿みたいに嬉しそうにするお嬢様
ワカ、を見てると釣られて口元が上がってしまう。一度ため息をつい
てから、目をキラキラ輝かせる少女に告げた。

「おし、教えろって言ったな?俺の授業は厳しいぞ。付いてこれん
のか?」

「はいっ」

「じゃ、一緒に土いじるぞ。まずお前、そんなひらひらした服着な
いで、ジャージ着てこい」

「ジャージ?」

初めて聞くように首を傾げる。

「えーつと…体操服?」

「そんなはしたない姿、淑女だから見せられません」
自慢げに言いのける頭を軽く小突く。

「阿呆、汚れてもいい服着てこい」

「いたあー…ゼンのほか！」

「淑女はバカなんて言わないぞ」

ハツと口を覆つて、言わずともしまったとこぼす百面相に、俺は腹を抱えて笑つた。

しかめっ面するときからころころ表情変えてたもんな。

この小さい生き物は、何をしでかすか予想がつかなくて、どうしようもなく俺をかき乱す。

でも、悪くない。

つられて笑いだすワカ笑顔を見て、そう思った。

第八話

そよそよ、優しい風が部屋を揺らす。

足先が固まるくらいガンガンに冷えていた部屋は、俺の強い要望により、窓を開け放ち静かな扇風機が回っていた。

「まだ？」

「ちよつと待ってっつて」

首を伸ばして、答えを見ようとするワカを制して、頭をかきむしる。

何だこのクソ問題！

「もう15分経ちますけど…」

ワカは飽きたようにベッドにダイブした。大きく伸びでもしてのほか、気持ち良さそうな声が響く。動き回ると少し汗ばむが、それくらいの温度でこの小さい体にはちょうど良いようだった。

「ダメだ！何だこの旅人算って。ややこしい、xとかyで表せよ」
正直それでも解ける気はしないが…悲しい成人の精一杯の見栄だ。

「よしパパの言う通りだ…」

感嘆のため息が、痛々しく響いた。

俺は今、一度看病のために訪れたワカの部屋にいる。強引に引きずられ、夏休みの宿題を解く羽目になったのだ。

さすがに、分数程度だと歯牙にもかけず鉛筆を持ったのだが…。簡単なようで難解な言い回しがまず理解できず、公式を見せられてもちんぷんかんぷんでお手上げだった。

「頼むから誰にも言わないで…」

弱々しく俺は泣き付いた。二十歳の心が折れそうだった。

昨日あの後、鳥居さんから“汚れても構わないが、気品を失わないパンツ”は用意がないと信じられないお達しを受けた。明日には用意すると言われ、ワカは日影に入って大人しく見ていた。

元々、作業車を興味津津に覗いていたくらいだ。種の種類や道具の名前をいちいち質問してきて、満足そうに頬杖をついていた。

今朝は、どこから掻き集めたのか光沢のある麻のパンツを何本も広げ、俺を待ち構えていた。

大きな帽子と軍手をはめてやると頬を紅潮させて喜んだ。

何を植えるかは特に決めていなかったから、ワカの好きな花を聞く。

「何のお花があるか良く知らない。でも青が好き」

好んでなのか、今日も緑がかったブルーのブラウスを着ている。なかなか難しい注文だったが、その色からハーブでも良く知られるタイムの一種、イブキジャコウソウを思い出した。

あれなら食用にもなるし、香りが強すぎるのが難点だが、頭上にあるピアノの部屋まで届くかもしれない。

そのことを伝えると、ワカは目を丸くして驚いていた。

「それならピアノの練習もはかどるかも！」

素直で、表情豊かなワカとの他愛もない会話は途切れることがなかった。

花が好きな母親に早く知らせたいと言うので、電話はできないのかと聞くと、

「…お仕事してるお母様の邪魔はしたくないもん」

と返ってきたので、言葉を失った。

大きく輝く瞳がほんの少し陰る。寂しくないのか、とか偉いな、とか口から出そうになる陳腐な言葉を飲み込む。この少女には分かり切ってる言葉だと思った。

「ワカ、植物園って行ったことあるか」

陰った瞳は、年齢に不相応な落ち着いた空気を作る。それがどうしても嫌だった俺は、何とかして話題を変えた。

「ううん、ない！」

ぱあっと顔を綻ばせて、見上げてくる。

「植物園なら、これから植えるタイムもたくさん種類があるぞ」
「ほんと？青じゃないお花もあるの？」
「ああ、白とかピンクとか。あるよ」
「すごいなあ。どんなお花なのかな」

それだけ言つて口を噤んでしまった。当然行きたいと言われると思つていた俺は、思いつ切り肩透かしを食らつた。

「…行きたくないの？」

「行きたいけど、一人でお出かけしたら迷惑かけるもの」

「誰に？」

「トリイとか、みんなに心配かける」

「俺が連れてくよ」

「ゼンが？」

長い睫毛に縁取られた、茶色がかった瞳がいつぱいに開く。

「迷惑じゃないよ。友達なんだから？」

安心させるように言つと、何度か瞬きして眩き始めた。

「いいのかな？ほんとに？」

最初あれほど敬遠していた土を世話しなくいじり始める。その、何とも微笑ましい様子に、俺は吹き出すのを我慢した。

「でも、すぐじゃないぞ。この仕事が終わらなきゃ」

わざと厳しい声を出すと、グツと拳を握つて、

「うん！頑張る！」

と勢い良く返事をされた。

やっと望んだ態度を拝んで機嫌良くした俺は、土を平たんにするた

めの道具を作業車に取りに一旦その場を離れた。

「あれ？ないな」

朝はあつたはずの背の高い道具が見当たらず、そのまま回ってスーさんの方に足を運ぶ。

「レーキなら榊兄さんが持ってたよ」

親父と入れ違いになつたらしい。いつもなら舌打ちの一つも出るところだが、心に余裕があつた俺は礼を言つて、親父を探しに行く。

一心不乱に剪定している親父に、声をかけるのはなかなか勇気がいるものだ。仕方なく持ち場を探すとやっと見つけたので、裏庭に引き返す。

まだまだ厳しい日差しで、額から流れる汗を拭いながら、元の場所に戻ると、元気に土をいじっていたワカが 倒れていた。

「おい！」

一気に血の気が引き、全て投げ捨てて駆け寄る。
髪についた土を払って抱えると顔が青白くなっていた。

「ワカ、どうした。大丈夫か」

揺さぶりたい衝動を必死に押さえて怒鳴る。

「貧血か？また？」

自分の背中が嫌な汗でぐっしょりぬれているのを感じた。

とにかく、安静にできる場所だ。

ついさっきまでいた部屋に俺はワ力を抱えて走って行った。

2回目だが、なりふり構わず慌てていたからだろうか。足音に気付いた鳥居さんが、悲鳴を上げた。

「和華様！」

「鳥居さん、冷やすものとスポーツドリンク持ってきて！」

叫ぶように言い捨てて、階段を駆け登った。本当に驚くほど軽い。ちゃんと食べているのだろうか？

以前、鳥居さんがワ力が食欲がないとぼやいていたのが頭を掠めた。無事ベッドに寝かせると、少し涼しい風のおかげか、顔色が戻ってきた。熱中症だったのだろうか。帽子はかぶっていたものの、そこまで気を回せなかった自分に舌打ちした。

脇に氷嚢を挟み、甲斐甲斐しく世話する鳥居さんを黙って見守る。無茶をさせすぎていたのか？

そうだとっても、たった一日で深層のお嬢様に戻らせるのは、どうしても我慢ならなくて、下唇を噛んだ。

「やっぱり…お外に出すべきじゃなかったんだわ」
うっすら涙を浮かべる鳥居さんを見て、カツと血が上った。

「それは違うだろ」

血が引いたり上ったり、俺もなかなか忙しい。

「まだ小学生なのに家に閉じ込めて、どうすんだよ。飯食ってるの？食欲ないって言ったよな。この真夏に水分も取ってなきゃ、倒れるさ。過保護なものいいけど、今遊び回るのが一番必要な時期だぞ。これ以上悲しい顔させたいのかよ」

まくし立てながら、落ち着け、とセーブする頭の声が聞こえる。第三者が口を挟むことじゃない。分かっているはずなのに、先ほどの陰った瞳を思い出すと止まらなかった。

俺は真剣だった。

「朝…和華様、ジュースしか召し上がりなくて」

「ビタミン、ミネラル、鉄分！朝はジュースでもいいから酢を混ぜて、果物入れたヨーグルトくらいは絶対食わせる。飲み物持たせて、少しずつ口にいれさせないと脱水症状起こすよ」

「脱水症状…」

鳥居さんも真っ青になった。

「倒れたのは食事と水分不足だと思う。今日、外で動いたから夜は腹減るんじゃない？お嬢様の好物出したらげよ」

俺の言葉に思い当たることがあったのか、鳥居さんは神妙に頷いた。ワカの落ち着いた顔を優しく見つめながら、言った。

「変ね。和華様のこと、昔から良く知ってたはずなのに。ずっと元気がなくなかって途方に暮れちゃって。昨日は久々にあんな笑顔見たの」「うん。すげー頑張ってるよね」

両親がいなくて寂しいだろうに。どこにも遊びに行くこともなく退屈だろうに。文句でも吐き出せば楽になることを、ワカは知らずにグツと我慢してしまう。それは、相手のことを考えてのことだ。まだ年端もいかないうちから、自分を制する辛抱強さと、相手を思いやる心の広さを持っている。立派な淑女だと思った。

「ワカも鳥居さんに迷惑かけたくないって言ってたよ」

我が子のように心配するこの目は、ワカにとって救いだったと思う。それなら、もう少しくらい甘えたって構わないのだ。

鳥居さんの目が潤んで見えたので、俺は気付かない振りをして部屋を出た。

裏庭に戻ると、やけに広い気がしてならなかった。元々庭園と言ってもいいほどの広さなので当然のだが、隣りにコロコロ表情を変ええるワカがいなかったからか？と自嘲した。

あまり兄貴風情を出してもいけない。この仕事が終われば、会うこともないのだ。

日照りの眩しさに顔が歪んだ。

小一時間しただろうか、小さな足音が聞こえて、後ろを振り返った。

「ゼン！」

「えっ？」

ワカが額に冷えピタシートを張ったまま、飛び付いてきたのだ。

「な、何してんだよ」

「どうして先に進めちゃうの？一緒にやってよ」

「ばか、お前倒れたんだぞ。もう少し寝とけよ」

「もう平気だもん」

ワカはそのまま俺の腰に抱き付いて、首をぶって抵抗した。

「おい、落ち着け。立ちくらみ起こしたらどうするんだ」

細い肩を押さえて、日影に座らせた。ベッドからそのままできたのか帽子もかぶっていない。

どうやって寝めようか首を捻っていると、意志の強い目を向けられた。

「寝かせようとしたって無駄だもん」

口を尖らす顔は、随分色が戻っていた。

「そんなに土いじり気に入ったか」

「ゼンと一緒にいたい」

直球の言い方に俺は咳き込んだ。随分とまあ、懐かれたものだ。

真直ぐ見てくる視線に耐えられなくて、俺はワカの頭を正面に戻し、スポーツドリンクを握らせた。

「ワカ、飯食ってないんだって」

「お腹減らないの」

「でも三食取らないと、一日のエネルギー取れないぞ。ちゃんと食べろ」

「食べたらず伝っていい？」

「うん」

そう言つと、小指を出してきた。

「指切りげんまん」

知らないの？と自慢気に言ってくる。小さい指を自分と合わせて約束のセリフを歌う。

この少女は、俺と別れるとき少しは寂しがるとはだろうか。

嬉しさを微塵も隠さず、全面に表すワカを見て、そんなことを思った。

「この近くにひまわり畑があるんだよ」

「見たい！連れてって」

「おい、遠慮しねーのか」

甘えることを少しは覚えたのか、素直な反応に笑いが止まらない。

「行きたい！行きたい！」

「うるせーな、飯食えるようになったらな」

「はーい！」

何故、律義に手を上げるんだ。

空に真直ぐ伸びる腕に、心の中で突っ込んだ。

第九話

ワカは一週間ぶりに、朝からパンを平らげたらしい。

俺と約束した翌日の昼から自ら食うようになったとか。

夜は、一日の出来事を話しながらの食事になるから、いつもの倍時間がかかると、鳥居さんが嬉しそうにこぼしていた。

ワカはあれから毎日自慢気に体重の報告をしてくる。

「34キロが35キロになった」

それが軽いのかなんなのか全く分からない数字である。

善美に、35キロって女子にしちゃ重いのか？と聞くと、無表情で殺害予告をされた。

青白いだけの頬に血が通ってきたのか、徐々にふっくらとしてきた。鳥居さんの計いで、首に断熱材の入ったスカーフを巻き、つばの広い麦わら帽子をかぶって準備も万全だ。

日に当たると赤く湿疹するらしいワカは、上質な日焼け止めを丹念に塗らなくてはいけなくて、面倒臭そうな顔をする。

3時間毎に、顔から全身に塗るクリームはラベンダーの香りがした。常に彼女から香るその花の匂いで、俺はラベンダーを見るたびワカを思い出す羽目になった。

最初はうるさく水分を取るよう言っていたが、習慣付いたのか自分でも気をつけるようになり、ワカは休憩を取れば一日中外にいても大丈夫になった。

「おし、今日ちょっとだけひまわり畑行ってみるか」

言い渡された裏庭の仕事は、もうほとんど終わっている。今は親父たちを手伝って、廃材を拾ったり、屋敷の雑草を抜いたり、本来ワカがやらなくて良いことまで俺について回った。

親父たちも最後の仕上げに入っているようだ。この仕上げにうるさい親父は、後半のほとんどを使うので、折り返し地点と言ったところか。

ワカの両親の帰国予定日もあと一週間を切った。

途方もなく続くと思っていた夏も、いつかは終わる。

健康的になって、より瞳の輝きを増すワカの笑顔を見て、思った。

ひまわり畑は、車で15分くらいだ。鳥居さんにこと細やかな注意を受け、お弁当を片手に出発した。

「お出かけするの夏休み初めて！」
小汚ない軽トラに似合わない、真っ青なワンピースが揺れる。

「ゼンが運転できるなんて」

「たりめーだ。小学生と一緒にすんなよ」

「宿題分かんなかったくせに」

ふふん、と鼻で笑う隣りの生き物の頭を片手で捕まえた。

「い、痛い痛い」

「降ろすぞコノヤロー」

「うー」

怒りんぼ、と小さい抗議が聞こえた。

「ねえねえ、植物園はいつ行くの？」

「ひまわり畑行くからいいだろ」

「ええっ！やだぁ連れてってよ」

「家族と行け」

車を自由に使える時間も限られている。親父の了承を得るのも結構大変だったのだ。

「やだよ！ゼンと行く」

「だってもう日にちないぞ」

明日から盆休みに入るため、公営の植物園は休館になる。
再開するのは、仕事終了日だ。さすがにその日に出かけるのは無理
だろう。

「夏休み終わってからでもいいから」

「え？」

駐車場に止めてから、シートベルトを外す。大きく息をついて、自分が少なからず緊張していたのだと知った。

「…絶対行くもん」

そんなに気に入ったのか。あんまり期待するものでもないのに、とこじんまりとした植物園を思い出し、頭をかいた。

ワカはシートベルトを握って俯いている。

「おい、着いたぞ。シートベルト取り方分かんない？」

そういえば助手席にも乗ったことないと興奮していた。身を乗り出して、外そうとした俺の腕に冷たいものが落ちてきた。

「え？ワカ？」

涙だった。ポロポロと止まることなく雫を落としていく。俺は慌てた。

「酔ったか？一旦降りよう、な？」

顔を覗きこむと、濡れた瞳が不安気に大きく揺れていた。薄く赤みを帯びたその瞳に、魂を吸い取られたようアホ面をした俺が映っていて、ごくりと唾を飲んだ。

「！」

すると、運転席から片手で身を支えて乗り出す俺に、ワカが首に抱き付いてきた。

耳にワカの頬が当たる。

ふんわりと、ラベンダーの香りが鼻をついて俺は息を呑んだ。

「絶対行くのっー!!」

シンバルが耳元で破裂したような、酷い耳鳴りがした。こいつ、このクソ餓鬼は、鼓膜に叫びやがった。

無理矢理離して、両耳を押さえた。

「うるせえー…」

痛烈な叫び声が、うわんうわんとこだまになって聞こえる。涙目になった俺は、なんとか冷静になろうとした。

すると、こういうときだけ目敏いワカが明らかに殺意を持って叫び出したのだ。

「やだ!!やーだー!連れてってー!!!」

「うるせえなっ!分かった!分かったから止めてくれ」

この細い体のどこから出てくるの分からない絶叫に、俺が悲鳴を上げた。

負けた。

「約束?」

涙の跡を残し、悪魔の化身が聞いてくる。

「分かった。連れてく」

うなだれて、そう返すとワカは一気に頬を染めて笑顔になる。

「ゼン、大好き」

甘ったるい声で毒を吐く悪魔に、わざとため息をついて、涙の跡を拭ってやる。

ワカの火照った熱が移ったのか、離れたあとも指がしばらく熱かった。

車を降りて、肌を焼くような強い日差しに目を細めた。

ワカがきちんと帽子をかぶっているか、体調など確認して、すっかり過保護になった自分に苦笑する。

一人でできる、と言うワカを信用していない訳ではないが、どうしても目で追って世話を焼いてしまう。悲しいかな、俺の奥底にでもある母性が反応するのだろうか。

太陽の恵を受けて、真直ぐに育つひまわりは、ワカの背丈を覆うほど伸びていた。それを見たワカは予想を裏切らず、口を半開きにして立ち尽くし、間にある道に入ってみると勧めると、花の中から歓声が上がった。

「きゃー！ゼンー！」

飛び跳ねると、黄色の花から麦わら帽子がぴよぴよ見える。

「すごいかー」

俺の仕業でもないのに得意気に問うと、

「すごいー！」

間髪を入れずに喜ぶ声が返ってくる。

まだまだひまわりに囲まれていたかったようだが、熱中症を恐れて木陰に引つ張った。

「まだいたいよ」

「1回5分だ。そしたら30分木陰に入れ」

「ええっ！ケチ」

「ケチで結構。弁当はやらん」

「ゼン様あー」

嘆いて腰に抱き付いてくる。子どもの体温は高いのか、引っ付かれると妙に暑い。

振りほどいて、レジャーシートに座らせた。

鳥居さんが持たせてくれた弁当は、サンドイッチだった。ワカの好きな香草にチキンが挟まったものや、デザート用のイチゴと生クリームみたいなもの、色んな種類があった。

異常な数の保冷剤に囲まれ、かなり冷たいサンドイッチになっていたが、湿気が高い今はちょうど良かった。

「外で食べるとおいしいね」

「うん、美味しいな」

俺だと二口で無くなるサンドイッチを、ワカはチビチビと時間をかけて食べていく。それでもここまで食欲が戻って良かったと眺めた。

「ちゃんと噛め。ゆっくり食べるよ」

「ほんなのはわかってまふー」

「汚えな」

ハムスターみたいに頬を膨らます様子に笑いがこぼれる。

木陰にいと、土も冷えているからか少し汗が引いていく。少し食休みを取ろうと言うことになり、横になった。

「腹出すなよ」

「出しません！」

くだらない言い合いをすると、ワカがじっと見てきた。

「な、なに」

「こっすると近いね」

言われて気付いた。

俺とワカの距離は拳二つ分くらい。睫毛の一本一本まで見える距離に顔がある。俺の心臓が跳ねた。

「ゼン、いつも大きいから…遠くて」
白い頬が動く。

「今日はすごく楽しい。ありがとう…」

少し掠れた声で呟いて、そのままふるふると瞼が閉じていく。

「眠いのか」

「ん…」

「少し寝ていいよ」

頷くように紅い唇が少し笑い、頭を俺の胸の辺りまで下げて寄せてきた。

「ゼン、すき」

寝言なのか。

その言葉はいつまでも俺の体で響き続けた。

スウスウと心地よい寝息を立てるお姫様を横にした俺に、睡魔は一行に襲ってこなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8219s/>

可憐な罍

2011年6月25日12時03分発行